

はじめに

宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター（CPMS）は、これまで日光市国際交流協会による交流事業「食から世界を考える」の開催に協力してきました。2015年度からは、国際学部の外国人留学生、および留学経験日本人学生によって、栃木県大学・地域連携プロジェクト支援事業「外国人留学生と留学経験から見る日光の観光開発プラン『世界遺産+1』」を実施し、CPMSと日光市が協力しました。2016年度は、宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センターと日光市国際交流協会による主催事業として、「国際交流都市日光の再発見！－学生が考える日光のもう一つの地域発展プラン－」（通称日光プロジェクト）を日光（東照宮）エリアおよび奥日光（中禅寺湖）エリアで実施しました。本プロジェクトは、「国際交流都市日光の魅力」を①観光開発、②国際交流、③地域づくり、の3つの視点から再発見し、留学生と海外経験のある日本人学生の気づきによるフィールドワークを行い、シンポジウムを通じて提言し、日光に対して国際貢献・地域貢献することを目的にしています。続いて、2017年度は「国際交流都市日光の再発見－『まちづくりと観光開発』を留学生と考える」をテーマに日光（東照宮）エリアおよび栗山・湯西川エリアで、2018年度は「国際交流都市日光の再発見－『足尾の歴史を活かした観光地づくり』を国際的視野から考える」をテーマに足尾エリアで、2019年度は「国際交流都市日光の再発見－『観光モデルを留学生と考える』プロジェクト」をテーマに日光市エリアおよび奥日光エリアで開催し、毎年それぞれシンポジウム、フィールドワークを行ってきました。

そして、2020年度は宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター／日光市交流協会主催事業「国際交流都市日光の再発見－日光のインバウンドについて留学生と考える」シンポジウムを2020年12月5日に開催しました。本年度は、世界や日本でのコロナ感染症の拡大の影響で、宇都宮大学の多くの留学生は来日できないという前代未聞の事態となり、コロナ感染防止のため、従来のような日光市内をバスで回るフィールドワークは中止となり、Zoomによるオンライン形式でシンポジウムのみを開催しました。今回のシンポジウムは、世界や日本のコロナ感染拡大が観光産業に影響を与える中、日光市のインバウンドの取り組みについて、留学生や日光国際交流協会会員と共に意見交換を行い、国際交流都市日光の地域資源・観光資源のあり方について検討しました。

本報告書は、以上の20年度のシンポジウムの内容をまとめたものです。本シンポジウムでは、これまでのプロジェクトの経験を基礎に、『日光のインバウンド』を国際的視野から留学生と共に意見交換を行いました。参加者は、宇都宮大学学生、卒業生、大学関係者、日光市関係者などでした。プログラムの内容は、第1部は、鈴木富之氏（宇都宮大学地域デザイン科学部講師）・康少騫氏（宇都宮大学大学院生）による「日光の観光産業のインバウンドの展望」、野口一徳氏（日光市観光経済部副主幹）による「WELCOME TO NIKKO 日光市におけるインバウンドの取り組みについて」、増淵隆宏氏（エム・アール・ピー NAOC代表取締役）による「日光市における体験型観光の事例から」、第2部は「日光プロジェクトに参加して－何を再発見したのか」をテーマに、過去の日光プロジェクト参加者のラハマン シェイクハビブルさん、タマン ラズクマリさん、鈴木アリサさん、日光市観光経済部観光課長の伊東剛氏のコメントの後、意見交換を行いました。

最後に、本プロジェクトおよび本シンポジウムで世話になりました、日光市国際交流協会の会員の皆さま、参加してくれた学生の皆さん、テープおこしをいただいた宇都宮大学国際学部学生の桜井愛菜さん、小野崎仁さん、鈴木アリサさんなど関係者の方々に心からお礼を申し上げます。

2021年3月

宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター

センター員（グローバル担当） 重田 康博